

中国と日本における色彩語の対照

唐 向 紅
鷺 尾 紀 吉

〈目次〉はじめに

I. 色と色彩語の意味

II. 中日における色彩語とその文化の内包の対照

1. 中日における「赤」の比較
2. 中日における「白」の比較
3. 中日における「青」の比較
4. 中日における「黒」の比較
5. 中日における「黄色」の比較

III. 中日の色彩語の内包の差異を起こす原因

1. 民族心理と内心感情の相違
2. 社会歴史文化の背景と風俗習慣の相違

おわりに

参考文献

はじめに

われわれの祖先が色で美感を創ったり「個性」を表したりすることを意識して以来、色はわれわれの生活と切っても切れない縁を結びつけた。近代において、人工的な合成顔料の技術の発展に従って、色はわれわれの生活のいろいろな方面に強く影響を及ぼした。色の名称を表す言葉—色彩語は、独特な機能を持つため、その民族の独特な色の審美意識を反映することができる。このことから各国の伝統文化には重要な役割を果たしている。

中国語と日本語は両方とも色彩語が非常に豊富な言語で、また、人類文化が共通しているため、この2種類の言語に色の表現が通じ合っている所がある。しかし、各自の歴史と文化の背景の影響が違いため、色の認識と理解に対しても多くの相違が存在し、しかもこれらの相違は十分に色彩語の表現と使い方の上で体现してきた。本文はこれに対する対照を通じて、側面で中日両国の文化の源を探求し、それによって中日文化の相違点について更に深い考察を行おうと思う。

I. 色と色彩語の意味

色というものはものに発射され、反射され、あるいは、ものを通す光波は視覚を通じて、あるイメージを形成するものである。自然界で最も光り輝くアイデアで、人間の生活の一部分である。このような印象は言語に反映され、色彩語になってきた。色彩語はどんな民族文化と言語においても不可欠で重要な成分だと言える。中日両国は一衣帯水で、隣り合って位置し、文化の交流は数千年に及び、縁が深く、歴史も長く、途切れることもなく、両国は多くの面においていわゆる「同文同種」を形成して、これは両国の緊密な歴史的な血縁の関係がよく反映されている。しかし、中日は結局、違う民族と国家に属しているので、両国の言語文化には大きな相違点が存在している。そ

の差異は、色彩語と文化の内包の表現に更に著しく存在していることが明らかである。色彩語がその民族の言語と文化にそのような重い地位を占めるというのは、独特な言語の機能と文化的象徴の意義を持っているからである。中日の色彩語、即ち赤、白、黒、青、黄などの語彙の意義は一致して、つまり、その色の言葉に指される色で、客観的に存在している。しかし、人間は感情を持つ動物であるから、色彩語を使ううちに、もとの色を表すことから、新しい意味も多く生まれて使われるようになった。認められたり、否定されたり、賛美されたり、非難されたり、怖かったり、悲しかったりする。それによって人間の言語を更に生き生きとさせるようになり、文化の情報も豊かになって、文化の特色を体現し、その色彩語はもう具体的な色だけを指さないようになった。「語彙は物質世界の変化を反映したり、思想の発展を反映したり、時代の進歩を反映したり、同時に世界の多彩さも反映することができる。色彩語は言語の科学においてすでに特殊な領域に形成するようになった」(胡文仲, 2002) のである。

色に対して感じる発想は、色彩語に感情の甲斐や豊富な文化の内包を持たせようになった。人間発展の過程では、各民族はそれなりの風土や人情や文化の伝統を形成し、同じ色彩語には異なる意義を与えている。中日両国の言語において色彩語に表れた内包の相違は、中日民族が客観的な世界に対する認知を体現している。中日の言語の中での色彩語に対する分析と比較を通じて、言語に深く埋められる文化の内包への理解に役に立てると考える。

Ⅱ. 中日における色彩語とその文化の内包の対照

1. 中日における「赤」の比較

赤は中華民族の最も好きな色で、中国文化のテーマや精神の帰依になってきたともいえる。中華民族は昔から赤好きな民族である。北京オリンピックの「ロゴマーク」や「授賞の花束」、あるいは上海万博の中国館は人々に

深く印象が残されたのは真っ赤な「中国紅」である。これは赤が火や血液や明るくて暖かい太陽からの連想で、一般に「情熱」や「活気」など、精神や物事の盛り上がりを表すことが多いからである。

太陽が日を照らし、万物はすくすくと成長し、火と日が延びだした赤色は人類の敬虔な対象を形成する。そのため、中国語の色彩語の中で、赤は文化の内包が最も豊かな色彩語の一つである。赤を見ると日差し、烈火、情熱、生花などを思い出し、そして、熱烈、興奮、決意、警戒、好感などの感情を引き起こして、様々な関連な意味や象徴の意味が生まれた。中華民族の悠久な歴史文化の浸潤の下で、人々は赤にもたらされた視覚と心理的な強烈な刺激に、とっくに適応し、赤も中華民族の精神世界まで解けて、中華民族の血液の中で流れた（鄧泰和、2010）。

(1) 赤はめでたい、祝福、吉祥を表し、中国人の一生での大事な時は赤と切っても切れないのである。子供を生んでから赤く染められた卵を渡し、新年や祝日の日に、赤い服を着たり、赤い対聯を貼ったり、赤い灯籠を掛けたりする。結婚は言うまでもなく、何もかも赤である。赤い服、赤い布団、お客さんに渡すタバコも「紅双喜」（タバコのブランドの一種で、「双喜」は二つの慶事という意味、赤い包装で、縁起がいいので、結婚式の時よく渡す）である。自分の干支の年に意外の事を防ぐように赤い糸を飾り付け、邪気を避けるように赤いパンツをはく。

(2) 赤は盛ん、発達、成功、円満ということも表す。にぎわい、盛んなことは中国人に勢いがよいと呼ばれ、にぎやかな場所は「紅塵」と言われ、上司に重視される人は「紅人」と呼ばれ、どんな事をやっても順調的に行くのは「紅運」（幸運に恵まれる）といわれる。

(3) 赤はプロレタリア革命の勝利、成功あるいは政治の自覚が高いことを象徴する。「五星紅旗」（中国の国旗）の赤は色を指さずに革命のシンボルを指している。中国共産党の最初の政権は「赤い政権」と呼ばれ、最初の武装は「紅軍」と言い、最初の革命の発祥地は「紅区」と言われ、政治上の進歩を求め、業務上で骨身を惜しまず研究する人は「又紅又专」と呼ばれる。

(4) 赤はモモの花の色で、そして、モモの花色をよく女の子が恥ずかしくて顔が真っ赤になる色をとえる。そこで、中国語には、赤は女の子にかかわる物事を表す。例えば、女子が着る鮮やかで派手な服は「紅袖」と呼ばれ、美しい女子は「紅顔」と言い、女子の涙は「紅涙」と呼ばれ、女子の住む華美な住まいは「紅樓」と言う。赤は女性にかかわるものを修飾し用いられ、十分に賛美、好感を表現することが明らかである。

(5) 赤は中国語でまた婚姻と密接な関係を持つ。例えば、他人に円満で幸せな結婚生活を過ごさせる人は「紅娘」と呼ばれ、婚約する場合、男性側は女性側への結納を「紅定」といい、「赤い糸」は男女の縁を象徴している。もちろん、中国語では赤は時にはあまり良くない意味も表す。例えば、「赤信号」には戒めの意味を含み、「赤い顔」は怒りやけんかする場合に使われ、「紅眼」は嫉妬のことを揶揄したりする。しかし、これは一部の例である。「赤は尊敬して正統的な政治的地位、邪気をよけて悪い事を除き、めでたい瑞祥の色だと中国人に認められ、この三つの特徴はしっかりと赤を長くて衰えない中国の国の色になすのである」(呉東平, 2000)。中国語における赤の色彩語はすでに中国文化の縮図となってきた。

日本人も「赤」が神聖の力を持ち、悪い事を除いたり邪気をはらったりすることができると思っている。民俗学において、赤には「魔除け」の意味があるとされ、神社の鳥居は赤いことや、地蔵の涎掛けも同様の意味があるとされる(但し、諸説あり)。また、郷土玩具は、飛騨・高山市の猿ぼほなど赤いものが多い。子供への疫病除けの願掛けがこめられている。現在でも還暦で赤いチャンチャンコや赤い帽子、座布団が使用される。そして、日本民族は赤が病気を防いで、病気を治すことができると思っている。

江戸時代、天然痘除けとして赤い達磨が使用された。痘瘡神が嫌いな赤を集め、患者も家族も赤を着、赤い布団を用い、赤い玩具、赤い達磨、赤い春駒、赤い犬張子、赤飯、赤鯛、赤い幔幕、赤い注連縄、赤い屏風、赤色の多い痘瘡絵などを掲げる。用がすんだら燃やすか、川に流す。この風習の発祥は神聖ローマ帝国カール5世(16世紀)で、幼少時痘瘡に罹患したときに、

赤い衣類を着、部屋の装飾品など一切を赤色にし、赤い光で部屋を充たしたところきれいに治ったことから、この風習はヨーロッパでも、長く残ったという。

沖縄では病人に赤を着せ、痘瘡神を喜ばせるために歌、三味線で、痘瘡神をほめたたえ、夜伽をした。これを「赤い治り方」と称する（長崎盛輝，1990）。それ以外、赤は血のイメージから、「生」「愛」「祝賀」を意味することも多い。例えば、結婚式などの吉事祝典には、紅白の幕や紅白の水引が使われる。「赤飯」はお祝いの時に食べる。

しかし、赤は日本の色の序列の中で最後に位置し、大きな凶悪な色でもある。日本古代の囚人服は赤である。民俗にも「赤不浄」の観念が昔からある。赤は審美の意識で排斥され粗末に扱われ、この点では中国と明らかに異なっている。赤は日本語では「明らかな」「全くの」という意味を持つことがある。例えば、赤貧、真っ赤な嘘、赤っ恥など、日本語で多くの「赤」を付ける言葉はけなす意味合いで、「赤本」、「赤点」、「赤新聞」、「赤きは酒の咎」などである。「赤」はまた「危険」の意味があるから、常に警告の色として用いられる。消防車、消火器とパトロール・カーの上の明かり、火災の押しボタンなどは赤である。道路の上で「赤信号」は警告の意味を持つ。サッカーの試合の「レッドカード」(Red card)は嚴重にルールに違反して、罰され退場させることを表す。

日本語でも「赤」は共産主義、急進的な意味を表す。しかし、両国とも革命や共産主義を表すが、共産主義の発展が中国と日本ではっきりと異なった歴史を持っているため、そこには大きな差が存在している。共産主義者は日本の歴史でかつて弾圧された歴史の背景があり、従って日本語で「赤」は共産主義を表すと同時に、消極的なこと、けなす意味の語感を含んでいる。「あいつが、赤だ」は差別や偏見という意味を含んだ。これは中国語での「紅軍」など共産主義の革命にかかわる言葉とは本質的な違いを持っている。

2. 中日における「白」の比較

白は全ての色の可視光線が乱反射されたときに、その物体の表面を見た人間が知覚するところの色である。中国の古代に五行思想の影響を受けたため、白を欧米の殺害する「白虎星」と関連させて、白に死亡、邪悪、恐ろしい、不詳なシンボルとして使われる。そのことから、中国では葬儀を行う「葬式」を「白事」と称し、白い喪服を着たり、白い柩の安置の部屋を設置したり、白い哀悼用の対聯を掛けたり、あるいは白い慰霊用の紙銭を散らしたりして、至る所に悲しい、哀悼する気持ちが流れている。

昔では「白虎」を悪魔とみなして、男の人に悪運を持ってくる女の人を「白虎星」と呼ぶ。政治的に、白は反革命や反共主義や墮落を象徴する。これはフランス革命やロシア革命の時に、王党派が白旗（ブルボン家の白百合紋章に因んだ）を目印としたことに由来する。ここから、右翼や政府側が「白」で呼ばれる例もある。例えば、反動的な軍隊は「白軍」と呼ばれ、反動派勢力が支配する地区を「白区」といい、反動派に創立される政権は「白色の政権」、反動派の暴行にもたらされた恐怖は「白色テロ」などである。時代に立ち後れる条件は「一窮二白」、力を尽くすが利益や効果が得られない場合は、「白忙」（無駄にすること。白费劲、白干ともいう）、あるいは「白搭」（何にもならないこと）といわれ、知力が低く浅学は、「白痴」（あほ）と称される。ほかに「打白条」（どこかで食事が済んだ時、お金を払わずに、ただ、白い紙に今日××元消費したことを書く。まとめて払う時があるが、払わずにすむときもある）、「白用」（費用を払わずに使うこと）、「吃白食」（お金を払わない食事）等、「白」は無駄に何かをやることを表し、「白眼」の「白」は軽視する感じを含める。要するに、中国の伝統的文化で「白」は不吉なことを指し、ずっと冷遇されている。

中国では、赤と白とは常に対立の色として評価する。「紅白の事」の説もある。結婚のような慶事は赤で表すので「紅事」で、その代わりに「白事」は葬儀のようなことを表す。日本で赤と白とは相対的な色と認めないだけで

はなく、かえっていつもこの2種類の色が結びつけて使われ、例えば日本の賀喜の袋は紅白交互の色で、神社で巫女の多くの女性達は白い上着と赤いスカートを着る。新年の紅白歌合戦、日本の国旗は白に赤い日である。それに、日本の伝統的な結婚披露宴で、お嫁さんは赤い服を着ず、逆に白い和服を着て、自分の心が清さや上品であるということを表そうとする。この点ではヨーロッパの白いウェディングベールと同じ発想を持つ。

日本では、伝統的な審美意識の中で無垢や白を美とみなすのが普通である(葉渭渠・唐月梅、2002)。赤と逆であって、日本人は白が好きである。白は神聖、純潔、素直、明らかな意味合いを持ち、巨大な魅力があって、人を驚かせさせる。そのため、日本の古代の美学意識は主として雪、月、花である。雪と月は白で、それに日本人の意識の中で白い花が最もきれいだからである。白は質素であるが、蘊意は豊かであるから、メインテーマになって、昔から日本人に好まれている。国家のシンボル——国旗は白地で、真ん中に赤い太陽があり、日の神様に美しい日本国土がつくられ、万物や生き物が育成されることを象徴して、人に厳粛、厳か、清い、生命力あふれる感じを与え、日本人は白に対していかに尊敬しているかが明らかである。日本語に「白眉」は抜群に優れていて、最もすばらしいものを指し、「白星」は勝利の印で、日本の国会での賛成票は「白票」と言われる。

古代日本では、「白」は清明、浄化を意味し、ひいては白が超能力と生命を持つことを信じてきた。史料によると、古代に神に献上するものは白しかないといわれる。『万葉集』には白い色を賛美する詩は41%を占め、白色が出る回数は第1位であった。平安時代の『八代集』では白色が45%を占め、中世『十三代集』には51%まで達する。日本の古典名作の中の貴族の美人はほとんど濃い白粉で化粧した。奈良時代の「養老衣服令」の中で、白色は天子の服の色として決められ、上品や神聖を示す。近代の武士の服も白色を基調として、高上の精神のシンボルである。

印象的なことは、やはり日本の伝統式の結婚披露宴である。神前式の結婚披露宴で、お嫁さんは濃い白粉で化粧して、「白無垢」の和服を着て、純潔

で無垢のことを示す。それに花婿さんは黒い正装、胸先で白い花を結びつける。男の客の服はもっと面白い。全部黒の背広に白いネクタイをしめる。結婚披露宴は黒と白の雰囲気の中で行われ、中国の真っ赤の披露宴とは極めて対照的である。日中両国では、ここに色に対する認識の相違が明白に現れる。更におもしろいのは、日本の歌舞伎では「白い顔」はいい人で、「赤い顔」は悪い役であるが、この点、中国の伝統的文化では「白い顔」は悪役で、「赤い顔」はいい役ということと正反対になる。

それ以外に、白色も日本の葬式に用いられるが、その意味は中国と全然違う。日本ではただ死者に白衣を着させ、その上白い衣服しか着ない。これは「白」が諸色の始まりで、人生は白から始まり、白に終わるはず、ということからきている。つまり、「人間元来無一文ということである」(李慶祥, 2002)。従って日本人が生まれる時と死ぬ時にすべて白い服を着させ、白にはずっと生きと完璧を隠され、それに「白から始まり、白まで終わる」という考えも「禪」の美学の観念に合う。そうすると白が好まれることは、「禪」の思想が色での体现である(魏麗華, 2003)ということになる。白は日本人にとって、ずっと「神霊の色」として取り扱われる。中国では、白は伝統的な喪服の色とされ、白い喪服を着て死んだ人への思い出と悼む気持ちを表す。それに対して、日本の葬式では、みんな黒い衣服を着て、亡くなった人への偲ぶ気持ちと悲しみを表す。

そのほか、白は日中両国の言葉では、また降伏、屈服の意味をもち、『日本書紀』に「新羅王が白い旗を揚げて降参する」という記録があり、従って戦争で白旗を挙げる方は誠心誠意に相手に降伏することを表す。そこで、中国語では「坦白、自白、白旗、白書」で、日本語では「自白、白旗、白状」などはすべてこの意味を表す。同時に白には反動的、立ち後れ、認識不足という意味もある。例えば「白軍」、「白党」、「白色テロ」、「白い政権」等である。中国の古代の作品の中で「紅装」、「紅顔」等の言葉で、若く美しい女子を描くのはよくみられるが、日本の著作の中でこのような描写はあまりみられない。貴族の美人は殆ど白粉で化粧する。このことから、日中両国に白に

対するイメージには大きな相違点が存在していることが分かる。

3. 中日における「青」の比較

緑の色は命と希望の色で、真夏の時期の木や芝生などがよく茂っている色である。だから、中国には「緑色の工事」——大規模に木を植える——があるとのことである。日本にも「緑の週間」、即ちみどりの日（国民の祝日）を最終日とする一週間がある。緑豊かな自然を守り発展させるため、緑の羽根募金呼びかけられたり、全国各地で植樹祭などが行われるという週間である。また緑も青い色と称するため、中国語では「青山緑水」や「青菜」や「青草」などの語彙があり、日本語では「青葉」や「青ウメ」などがある。交通信号で、中国語では「緑灯」と言い、日本では「青信号」と呼び、その言い方は異なるが、機能は同じで、安全通行の標示のことである。緑の色は植物の命の色で、エスペラント語では緑をシンボルとして無限な生命力と希望を表す。従って、中日両国はともに緑で平和を象徴する。

また、「グリーンピース」という組織がある。世界的な規模で起こる環境問題に取り組む国際環境保護団体である。西洋諸国は緑で勝利を象徴する。特に指摘しなければならないのは、中国の郵便ポストの色は緑で、日本の郵便ポストの色はオレンジ色であることである。このようなところに両国の異なった点があるが、この2種類の色はいずれも目立つ色で、人目を容易に引けるからである。

日本人にとって、青の誘惑と白の誘惑は同じ魅力があって、正宗敦夫の『万葉集』の総括的な索引の統計によると、「青」の出現の回数は80数回に達し、白、青、黒、赤などの色の中で第2位を占めることから、青は日本人の色の審美意識において重要性をもつことがわかる。

中日両国の古代では、緑は生まれが卑しいことを表した。例えば唐代の時、七品以下の官吏はすべて緑の長衣を着た。日本は隋唐制を学び、地位のない侍女を「青女房」と称し、また地位のない庶民を「青人草」と称したが、これはすべてこの意味から生じたものである。葉のイメージから転じて、「安全」

「成長」「少年」「幼稚」のイメージを伴うことも多い。現代社会では、広く化学肥料を使って野菜と果物を栽培し、人間の健康に悪影響が与えられたことで、今全世界では緑が「汚染していない」、「健康的」、「エコ」のシンボルになった。例えば「緑の旅」とか、「グリーンフード」とか、「緑の冷蔵庫」などがある。中日両国はまた青い色で「幼稚」、「大人らしくない」、「幼い」などを表す。例えば、中国語で「青苗」という言葉があり、日本では幼稚な様子を「緑い（あおい）」と表現する。生まれたばかりの赤ん坊は「青児」と呼ばれ、「青二才」が世間知らずの若者のことを表す。

4. 中日における「黒」の比較

黒は石炭や墨みたいな色で、物体が完全に日光、あるいは日光に似ている光を吸収する時に呈する色、即ち日光に日焼けされた色である。中国の『説文解字』には「黒は火に燻された色である」との解釈が記載されている。つまり、黒は物が火に燻された後に呈する色だという意味である。白にひきかえ、黒は人間を視覚上の厚さ、沈黙感を感じさせるので、大昔では莊重、尊さの象徴として使っていた。

黒は中国の古代でかなりの高位に立ち、夏、秦の時代及び漢時代の初期、黒い衣服は帝王と官員の朝服にしていた。仏教が中国に入った後、仏教徒は黒い服を着て、人間に恭しい、莊重な感じを与えてくれた。中国演劇のお面で、黒い顔は「包拯」、「李逵」などのように人間の剛直、勇ましい性格を象徴している。同時に、黒も夜色に似ているので、黒がまた暗闇、邪悪、恐怖の意味を象徴している。それゆえに、黒も反動、不法、邪悪などの意味に繋がり、「黒幕」は背後で社会や業界などに強力な影響力を及ぼす人物。あるいはダークなイメージが伴うことから犯罪組織の首謀者のことも指す。中国語では「黒帮、黒手、黒社会（闇社会）、黒市、黒心、黒金政治（腐敗政治）、黒五類（文化大革命での打倒対象階層）」のようなネガティブな用語法が多い。

昔の日本では黒は身分の低い人間の着る色であった。現在に至って、黒は暗闇と死亡に繋がり、恐怖、悲傷、悲哀と絶望を表している。日本では、黒

という喪の色を連想させる。日本人が葬式に参加する時、衣服は黒く、恭しく荘重にみえる。結婚式に参加する時、男性の衣服は黒い洋服に白いネクタイで、結婚式は黒と白の色調の引き立てにより、荘重な感じを呈しているから、黒は日本礼服の主色であるとも言える。一方、黒は不潔、邪悪、不正、不吉などと繋がり、例えば「腹が黒い」は職権を濫用した汚職犯罪現象を表し、相撲の得点表の上で黒いマークは「黒星」と呼ばれる。しかし、黒色は積極的な意味を表すこともある。例えば「黒字」は利潤の意味を表している。『軍紀物語』での記載では、古代の勇猛な将士の甲冑と兵器は黒いのが多く、勇敢、強さの意味を表している。

5. 中日における「黄色」の比較

黄色は日光と大地の色であると認められている。後漢の劉熙は、「釈名」で「黄色は日光如く眩しさである」と定義を付けた。中国の古代では、黄色は帝王の色、社稷の色、皇帝の権力と富貴を象徴することから、「黄袍を身に着けて、天下を手に入れる」との言い方がある。要するに、黄色は古代の最も重要な生産財—土の色を代表しているからである。

『説文解字』には「黄色は土の色である」と載せてある。日本では、人は黄色を見ると、中国、レモン、ブロッケン現象を思い出す。また、黄色は黄金と同じ色で、黄色も金持ちと権威、富貴と輝かしさを象徴している。宋代から清代までの中国では、黄色は皇帝・皇位を表す色として尊ばれ、皇帝以外の使用が制限された。黄色が皇帝を表す理由に、「黄」と「皇」の発音が同じ（北京官話ではともに huáng）だからであるという説がある。また、中国の五行思想で黄色が中央を表すことから、国の中心である象徴として黄色の服を着たともいわれる。それゆえに、黄色は古代に言うまでもなく帝王のシンボル色、庶民の禁忌の色にしている。宗教の面においても、道教の帽子、衣服、仏教の袈裟などは黄色く、荘厳、尊さ、光明と神聖を象徴している。つまり、黄色は中国では神聖で犯すことができない、尊く輝かしさなどを表す印である。

日本古代の歴史では中国のように黄色を崇拝することはなかったかもしれないから、日本古代の資料では黄色についての記載はあまり多くなく、『古事記』では「黄泉」で「地獄」を表す以外、他の描写はほとんど無かった。しかし、日本人はよく黄色で幼稚、未熟を表し、日本民俗でもよく生まれたばかりの赤ん坊を黄色の衣服で包むことから、黄色は未熟、頼りないことの代名詞になり、日本語には「黄色い嘴（乳臭い若者）」の言い方があり、これは「青」で未熟を表すのに似ているところがある。更に、薄黄色は未熟だけではなく、脆い、傷つき易い、風にも抵抗できない弱さの意味も持っている。前述の通り、日本の赤ん坊の衣服は黄色い布で作ることが多いのである。

黄色は各色彩の中で輝度は最高で、非常に目立つので、常に警戒色として使われる。特に黒との組み合わせは非常に目立つコントラストとなる。この「黄色と黒」の組み合わせを一般に「警戒色」と呼び、交通標識（警戒標識）や軽自動車のナンバープレート、鉄道の踏切、工事現場、各種工場などで多用される。警戒色としての黄色と黒の組み合わせは、太陽の色である黄色と、闇夜の色である黒を組み合わせることで、視認性を高めている。このように、黄色は暗い所でかなり目立つ色なので、交通安全には必需の色であると言える。特に小学生が登下校時に被る通学帽（黄色い帽子）や幼稚園児の通園バッグ、さらには児童用の雨傘には、黄色一色が用いられることが多い（かつては珠算塾の通塾バッグなどにも黄色が多く使われていた）。また合羽やヘルメットにも、黄色一色が用いられることも多い。

現代日本語の中には「黄金時代」、「黄金週間」との褒美語彙もあれば、「イエローカード」との貶す語彙もある。現代では黄色と書くと「卑猥な」の意味となり、日本でいうピンクと同様の意味合いで使われることもある。1980年代以降の反精神汚染運動において、低俗、西側かぶれとする文化を「黄色文化」と称する。黄色というと、「黄色書籍」、「掃黄」など現在に使用頻度が高い語彙を連想しやすい。実は黄色の貶す意味は18世紀から始まって、当時のアメリカは黄色い紙で色情淫猥などの不健康な書籍を印刷していた。中

国も影響を受けて、黄色で色情淫猥、腐敗墮落のものを表すことから、近代の中国では「製黄販黄」、「打黄掃黄」など黄色で構成した語彙も多く生まれた。

Ⅲ. 中日における色彩語の内包の差異を起す原因

1. 民族心理と内心感情の相違

各民族は歴史、伝統意識、民族心理、生活習俗などの原因により、自分なりの特別な感情を表す色彩語、および同じことに対しての異なる情感経験をもっているはずである。各民族の言語には社会意義を含める色彩語がある。各色彩はよく人間の感情および心理に大きな影響を与え、異なる民族が視覚と心理の面で連想される意義とその寓意はあまり同じではない。中国と日本はともにアジアに属し、大昔から中国文化は日本文化に大きな影響を与えた。色彩語の基本意義に対する理解の面では、両国の間に共通する部分がある。しかし、中日は同じ民族ではないからこそ、心理と思维方式の面では差異が存在しているのであり、色彩語の内包についての理解もあまり同じはずではないのである。

2. 社会歴史文化の背景と風俗習慣の相違

色彩語を作った過程で、各民族は自分が最も明るいものを探して色彩を表し、これもよく各民族の生活環境と歴史文化からの制限を受けている。異なる言語あるいは文化の中には、同じものには全く異なる連想を起こさせ、語彙は異なる文化内包または文化意義を含めている。色彩語は色彩の物理属性を映すだけではなく、社会属性と時代特徴をも投影している。

多くの色彩に関わる語彙は特定の歴史と地理的背景の上で生まれ、異なる歴史背景と風俗習慣も時々人間の生活と世界に対する見方に影響を与え、文化連想を決めている。各民族は自分なりの特別な伝統色彩と民族色彩を持ち、

色彩は人間の社会生活の諸分野に深く繋がり、民族文化、生活習俗および性格特徴を呈している。それゆえに、色彩語の作り方への把握、および豊かな連想意義への理解は広い社会文化の背景の上で考察し、言語の面から認知すべきである。そのようにとらえることによって、色彩語の作り方や豊かな連想に対して、合理的な解釈ができるのである。

おわりに

以上、中日文化における五種類の色彩語の表現上の異同を対照して比較し、中日の色彩語の内包の差異を起こす原因を分析した。上記に述べた内容以外にも、中日両国にはこれらの色彩に対する認識、理解およびその他の面での意義深い差異は多くみられる。この点については、今後の研究課題としたい。

参考文献 [最新発行順]

- [1] 邓泰和. 喜庆的中国红 纽约侨报 2010.8.23 E6
- [2] 姬新利. 中日基本颜色词及其文化内涵比较[J]. 商业文化 2010.4
- [3] 姜丽. 从“红”与“白”透视中日文化差异[J]. 河北北方学院学报 2009.6
- [4] 闫志章. 汉日颜色词文化内涵之比较[J]. 鸡西大学学报 2008.12
- [5] 刘容. 从色彩审美意识比较中日民族性格[J]. 大连民族学院学报 2005(3) : 43-46
- [6] 魏丽华. 中日文化中的色彩语的隐喻意义[J]. 日语教学与研究 2003(4) : 36-38.
- [7] 李庆祥. 日语颜色词的语义特征分析[J]. 日语学习与研究 2003.32-34.
- [8] 李庆祥. 中日颜色词语及其文化象征意义[J]. 外语研究出版社2002. (5) : 34-38.
- [9] 胡文仲. 跨文化交际学概论[M]. 北京:外语教学与研究2002
- [10] 叶渭渠/唐月梅. 物哀与幽玄——日本人的审美意识[M]. 桂林:广西师范大学出版社2002
- [11] 刘晓霞. 日汉颜色词的文化内涵及其翻译[J]. 日语知识2001. (3)
- [12] 王福祥. 吴汉樱. 文化与语言[M]. 北京:外语教学与研究出版社2000年
- [13] 吴东平. 色彩与中国人的生活[M]. 北京:团结出版社2000

- [14] 吴丽君 / 崔瑛. 论颜色词及文化联想意义[J]. 承德民族师专学报 1999. (3)
- [15] 杨振兰. 现代汉语词彩学[M]. 济南: 山东大学出版社1996年
- [16] 長崎盛輝. 色・彩飾日本史[M]. 日本: 淡交社1990